

ベンションの写真はことごとく男性たちで埋め尽くされており、見るものに一種異様な感を与える。言うまでもなく当時のショーウィンドウは女性をターゲットとしており、通りすがりの女性たちがガラス越しに飾り立てられた服に魅了され、今度はそこに自身を投影し、ついにはそれを購入＝所有することによってイメージと現実の自分を同一化させるという行動の惹起を究極の目的とするものである。そうしたファッションと女性を連結するためのショーウィンドウという装置＝メディアは、すべて男性によって構想され、運用され、演出された。こうして男性たちによって作られた「ファッションと女性」というイメージはもはや分離し難いほどに一体化し、やがて、衣服は女性が纏うある種の美術品として展示の場をショーウィンドウからミュージアムにまで拡張していくことになる……。

今日の私たちがあまり疑問を抱くことがない習慣や観念、常識は往々にしてどこかの時代やどこかの地域にその発生の淵源を持つ歴史的なものである。普段、私たちは自らが帰属する国家や民族、社会、集団の文化をいつとは知れぬ昔から連綿と継承されている自然発生的なもの、永久不変的なものと思い込んでしまっているが、実のところその多くは「作られたもの」であり、偶発的なものないしは意図的なものとして相対化する作業は重要だろう。しかも、産業革命以降（＝近代以降）のそれはテクノロジーの進化／発達に起因していることがほとんどで、テクノロジーによるイノベーションが新たな価値観や美意識を生み出した例は数え上げればキリがない。「ファッション＝女性のもの」という既成概念もまた然りで、すべての事象／現象は歴史性を持つということを本書は改めて私たちに思い起こさせてくれる。同時に私たちは、現在多くの人々によって共有されている価値観や美意識も、いずれ、新たな技術革新や新たなメディアによって書き換えられていくということを忘れてはならない。

アニェス・ロカモラ & アネケ・スメリク＝編

## 『ファッションと哲学——16 人の思想家から学ぶファッション論入門』

蘆田裕史＝監訳 フィルムアート社  
2018 年刊、512 頁、3000 円＋税

国際ファッション専門職大学  
高橋幸治

### <目次>

カール・マルクス——ファッションと資本主義

ジークムント・フロイト——フェティシズムでは終わらない—ファッションと精神分析

ゲオルク・ジンメル——哲学的モネ

ヴァルター・ベンヤミン——ファッション、モダニティ、街路

ミハイル・バフチン——グロテスクな身体の形成

モーリス・メルロ＝ポンティ——ファッションの身体的経験

ロラン・バルト——記号学とファッションの修辞的コード

アーヴィング・ゴフマン——文化観察の技法としての社会科学

ジル・ドゥルーズ——ファッションの襞に包まれた器官なき身体

ミシェル・フーコー——身体政治の形成

ニクラス・ルーマン——流行と時代遅れのあいだのファッション

ジャン・ボードリヤール——意味の終焉としてのポストモダンファッション

ピエール・ブルデュー——ファッションの場  
ジャック・デリダ——抹消記号下のファッション

ブリュノ・ラトゥール——アクターネットワークセオリーとファッション

ジュディス・バトラ——ファッションとパフォーマティヴィティ

「ファッションについて考える」ということ……、それはいったい何について考えることなのだろうか？ 衣服というモノ＝物質にデザインとして施された外見上の美しさや奇抜さ、斬新さ、それを纏う人物の趣味嗜好、人柄、センスといった内面性、さらには雰囲気として漂う社会的なクラスや経済力をも含めたステイタス等々……。語ろうと思えば語れることはそれなりにあるだろう。しかし、衣服というモノ＝物質がひとたび流行や時代という文脈の中に位置づけられ、単なる布のかたまりではない、ファッションというダイナミックな現象の名称に言い換えられた途端、私たちは衣服の中に密かに縫い込まれ、その周囲にまわり付き、その背後に透かし見えるさまざまな要素のあまりの複雑さについて口籠ってしまう。

そこには「私」の身体や精神にまつわる個人的な何かが顕現していると同時に秘匿されていたり、「私」が依拠している社会的な何かが露呈していると同時に隠蔽されてもいる。見えるようでいて簡単には見えない、語れるようでいて容易には語れないファッション……。衣服というモノ＝物質はいまここにしっかりと存在するにもかかわらず、その意味や価値が絶えず移ろいゆくファッション……。集団への帰属＝同一化を志向しているのか、集団からの逸脱＝差異化を企図しているのか、にわかには判じ得ない両義的な多様体としてのファッション……。そんな難物と対峙しなければならない時、私たちは眼前の対象をいかようにも切ったり刻んだり穴を穿ったりすることのできる、あたかも十徳ナイフのような思考の道具を持ち合わせていなければならないだろう。

本書は19世紀以降の主要な思想家・哲学者たちが駆使した思考の枠組みや彼等が提出した概念モデルをもとに、あらゆる角度から「ファッションについて考える」ことをサポートしてくれる書物である。取り上げられているのはカール・マルクスから始まり、ジーク

ムント・フロイト、ゲオルク・ジンメル、ヴァルター・ベンヤミン、ミハイル・バフチン、モーリス・メルロ＝ポンティ、ロラン・バルト、アーヴィング・ゴフマン、ジル・ドゥルーズ、ミシェル・フーコー、ニクラス・ルーマン、ジャン・ボードリヤール、ピエール・ブルデュー、ジャック・デリダ、ブリュノ・ラトウール、ジュディス・バトラーの16人で、それぞれの専門分野は経済学、心理学、身体論、記号論、社会学など広範な領域におよぶ。まさに、ファッションという曖昧で臆気で漠然とした素材を何とか分析の俎上に載せるための総力戦と言ってよい。

それぞれの思想家・哲学者についての章はそれぞれの研究者によって執筆されているわけだが、彼等が口を揃えて述べているのは、(当然のことながら)マルクスもフロイトもベンヤミンもフーコーもボードリヤールもファッションの分野をおもなフィールドとしているわけではない。幾多の著作の中においてもファッションという現象に言及している個所は決して多くはなく、むしろ少ない、いや、場合によってはないと言ってもよい。にもかかわらず16人もの思想家・哲学者たちの仕事が多動員されなければならないのは、それだけ、ファッションが多面的な相貌を持ち、そこに包含されている問題が多層的に重なり合っているからである。ファッションを考えたり語ったりすることが困難なのは、実は、考え得ることや語り得ることが驚くほどあり過ぎるからなのだ。

たとえばマルクスの生産や労働への考察、搾取や疎外といった術語を通じて、現在を不断に更新することを宿命付けられたファッションと資本主義システムとの共犯関係を考えることができるだろう。ファストファッションの生産過程における開発途上国での過酷な労働は、被服産業に関わる者なら誰しもが無関心ではいられないアクチュアルな社会問題である。ファッションに対するフェティシズムに関しては、フロイトの精神分析的な

アプローチを参考にしてみるのもよい。本書に取り上げられている哲学者・思想家の中でもファッション＝流行に関する直接的な言及が多く見られるジンメルは、上述した集団への同一化と差異化、つまり社会に対する恭順と抵抗というファッションのアンビバレントな特質を考える際に有効な道標となる。

ベンヤミンが『パサーージュ論』で描いて見せた19世紀パリにおける物質文化のスペクタクルを通して、ファッションが準拠する近代という時代について想いを馳せるのもよいだろう。『複製技術時代の芸術作品』の中で示されたアウラの概念によって注文服と既成服との関係を考えることもできるはずである。バフチンが提出したグロテスクの概念は、排除／抑圧／隠蔽されている醜いものの擁護によって、通俗的な美の観念の歴史性や相対性、欺瞞性を告発する。先鋭的なデザイナーたちがしばしば見慣れぬ奇怪な身体性を提示するのはまさにそのためである。ファッションを「視覚的な物質」としてではなく「身体的な体験」として捉えるにはメルロ＝ポンティの現象学が有効だろう。名著『モードの体系』の中でファッション雑誌等における「記述された衣服」を分析対象としたバルトの記号論的アプローチもいまなお力を失っていない。

パフォーマンスやドラマツルギーといった術語を援用しながら、ファッションを身体的な表現および社会的な現象として読み解く際にはゴフマンの理論が役に立つ。とりわけ難解なドゥルーズの諸概念は「まだほとんどファッションに応用されることがないもの」であるが、「生成変化」というタームを軸として、ファッションが「何を意味するのか」ではなく、ファッションが「消費社会に、環境に、あるいは工場労働者」に「何をなしているのか」問うことは、これまでにないファッション・スタディーズの新たな地平を切り拓くかもしれない。安定的かつ固定的な地帯からの差異化を運動の原動力として絶えざる逃

走や逸脱を繰り返すモードが、やがては独自の地位を確立した果てに陳腐化していくプロセスについても、ドゥルーズの「領土化」「脱領土化」「再領土化」が適用できる。

「特定の権力の利益に仕える知のシステムによって、すべてが歴史的に構築されていると考える反本質主義者」であるフーコーの思想は、ファッションと緊密な関係にある「健康、ジェンダー、セクシャリティ、階級、人種についての支配的な物語」の恣意性と政治性を暴き出す。同様にルーマンが深化させた社会理論は、ファッションが「近代社会の機能的サブシステム」であるという視点を私たちにもたらししてくれる。ファッションが1つのフィクションであるならば、それが誕生する土壌を用意した近代社会そのものも1つのフィクションであると言えるからだ。

シミュレーションとシミュラクルが野放図に乱反射し、空疎な記号との戯れに明け暮れた20世紀後半のポストモダン的大量消費社会を経て、私たちはいま、物質への関心を急速に喪失しつつある。モノ消費からコト消費へと喧伝されるようになって久しいが、モノであることをやめられない服という商品は、今後どのような価値を自身に付加していくのか……？ 大量消費社会の爛熟から飽和、そして衰退へと至る時代的変遷をしつかりと把握するためにも、現代の私たちはボードリヤールの仕事を避けて通ることはできない。

モノからコトへの価値転換は所有から共有への価値転換と一脈通じているところがあり、それはいまさら述べるまでもなく、インターネットをはじめとするデジタルテクノロジーの影響である。ブルデューが創出した「場」（「界」とも訳される）の理論、つまり、芸術作品などを成立せしめるための諸力がひしめき合い、せめぎ合いを演じる空間という概念は、ソーシャルメディア誕生以降のファッションという「場」に新たに闖入してきた在野の非専門家＝ブロガーたちの漸次的

な存在感の増加を説明する際に援用できるかもしれない。

革新的なデザイナーたちの試みはいつの時代にも既存のファッションの概念に揺さぶりをかけ、意味をずらし、旧来とは異なる新しい価値を創造しようとする破壊的な側面を持つが、ファッションに対する批判は常にファッションの内部からしか仕掛けることができないというテーゼはデリダの「脱構築」そのものである。ラトゥールの「アクターネットワークセオリー」は社会的／文化的な現象や事象は人間というアクターだけでなく、人間ではない多種多様なアクターとともに組織化されたネットワークであるという理論だが、このセオリーを基盤としてファッションを「文化－自然のハイブリッド」として捉えると、そこには衣服という商品を生産する過程に必要なあらゆるもの、たとえば綿花の栽培に必要な水までも1つのアクターとして考えることができ、そこから環境問題や気候変動といった、一見ファッションとは無縁と思われる領野にまでに思索の矛先を向けることが可能だ。最後になるが、現代におけるフェミニズム研究の第一人者であるバトラーの思想に触れることは、「ファッションについて考える」ためにもはや不可欠の要素となっているジェンダー学やクィア研究についての関心の扉を開いてくれることだろう。

当たり前のことであるが私たちは毎日服を着て暮らし、日々服選びに迷い、季節が変われば新たな服を買い、知人や友人の服を褒めたり、ときには貶したり、自分で考えている以上に始終服に注意を払っている、もしくは意識を奪われていると言ってよい。にもかかわらずファッションについて真剣に考えたり、もしくはファッションについて饒舌に語ろうとするとき、私たちは自分の手持ちの思考の道具や語彙の種類、評価の尺度があまりにもお粗末なことに愕然とする。しかもそうしたファッションをめぐる言説の貧弱さは、ともすると「センス」や「感性」という曖昧

でありながら（であるだけに）強力な思考停止ワードによって何となく覆い隠されてしまいがちだ。本書の監訳者である蘆田裕史は「監訳者あとがき」の中で図らずも次のように述べている（本書、462ページ）。

本書の（日本の）読者の多くは、「ファッションと哲学」というタイトルを見たときに、頭の片隅で鷺田清一氏のことを思い浮かべたにちがいない。一九八九年に出版された『モードの迷宮』——ファッション誌『マリ・クレール』での連載は八七年から八八年にかけて掲載された——は、およそ三〇年経った今でも、ファッション論に興味を持つ人ならおそらく誰しもが避けて通ることのできないテキストであるからだ。

まさに私自身、いまやファッション・スタディーズの古典ともいえる鷺田の『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫）を「思い浮かべ」ながら本書を読んだわけで、蘆田に図星をさされた思いだったのだが、それはひとえに鷺田による同書がいかに優れた著作であるという証左でもあると同時に、出版から「およそ三〇年経った今でも」ファッションを哲学的に論じた著作物といえば『モードの迷宮』くらいしか「思い浮かべ」られないという事態の証明でもあるだろう。しかし、蘆田は同書の価値を重々認めたうえでさらに次のように書いている（462ページ）。

そして、この著作こそが日本のファッション研究の特異性を表している。鷺田は本来の専門であるモーリス・メルロ＝ポンティの現象学をベースに、身体論的な観点からファッションについて衣服について論じたのだが、そこでは衣服と身体の関係が重視されたため、衣服の物質的な側面が重要とされていたのである。



繰り返しになるが、ファッションについて考え得ることや語り得ることは実は無数に偏在している。そうした諸問題を1つの切り口、1つの観点、1つのセオリーで捉え尽くすことは到底不可能である。鷺田の『モードの迷宮』は身体論というひとつの武器でファッションという難物に挑んだ1つのアプローチに過ぎない。同書が出版された30年前は言うまでもなくインターネット以前の時代であり、当時と現在とでは、私たちの生活環境はもとより、私たちを取り巻く政治／経済／社会／文化といったあらゆる状況が激変している。そうした世界変容を踏まえたうえで、いま、私たちはより新しい切り口、より新しい観点、より新しいセオリーでファッションを捉え直してみる必要があるだろう。

本書はタイトルにもあるように、上記のような新たな試みをスタートするにあたっての「ファッション論入門」である。ファッションに何となく興味と関心はあるものの、自分がいったい何に魅了され、心惹かれているのか、あるいは、現状のファッションにどこか不足や不満を感じている理由はなぜなのか、その答えを探しあぐねている学生にはぜひ一読を勧めたい。自分自身が抱えている漠然とした問題意識を対象化し、言語化するためのヒントがかならずや発見できるはずである。もちろん500ページに満たない紙幅の中で16人もの思想家・哲学者を紹介しているわけだから、当然のことながら、その記述は彼等の仕事のごく一部に止まるし、本書を読破したからといって紹介されている概念や術語を十分に理解できたと思いつむのは早計である。しかし、おもにポスト構造主義以降の思想・哲学の潮流、およびその提唱者たちが何を問題にし、いかに格闘してきたかを概観するには非常に適した書物と言える。

## 日本記号学会編

### 『(叢書セミオトポス 14) 転生するモード——デジタルメディア時代のファッション』

新曜社、2019 年刊

183 頁、2600 円＋税

国際ファッション専門職大学

大貫 徹

本書は2017年5月に開催された日本記号学会第37回大会をもとにして編集された論集である。その構成は四部構成となっているが、第四部が研究論文となっているため、実質上は第一部から第三部までの三部構成であり、その内容は以下の通りである。

第一部(19-63 ページ)の題目は「紙上のモード—印刷メディアと流行」であり、論者は、佐藤守弘、平芳裕子、高馬京子、成美弘至の四氏である。ここでは、第三部で論じられる予定のデジタルメディア時代のファッションを考察するために、まずは、その前段階である紙メディアの時代におけるモードを検証している。すなわち、衣服や流行が印刷メディアにおいてどのように表象され、どのように伝達されていたかを再確認する作業が中心であり、さらには、それがデジタル化によって何がどのように変わっていくのかに関する展望も示していると言える。ここで重要なことは、後に評者も触れることになるが、そうした議論の出発点として、論者全員が罗兰・バルトの『モードの体系』を据えている点である。その意味では、評者の見るところ、第一部がもっとも充実しているように思う。

第二部(65-96 ページ)の題目は「ストリートの想像力—HARAJUKU / SHIBUYA」であり、論者は高野公三子、水島久光の二氏である。第二部は高野、水島による対談が収められていて、さまざまなストリートファッションの話がかなりの濃度で展開されている。